

---

# 空の軌跡AC-another chapter-

ジェイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空の軌跡A C - another chapter -

### 【Nコード】

N1146BA

### 【作者名】

ジェイ

### 【あらすじ】

寝て起きたら転生していた少年、エリア。地方都市ロレントで第2の人生を始めた彼は、プレイヤー遊撃士として名を広めていく。物語の主人公たちと、ときにぶつかり、ときに協力しながら進む彼の冒険です。

これは、英雄伝説？ 空の軌跡シリーズの2次創作です。作者はみんな好きなので、アンチはありません。また、本作の主人公に原作知識は皆無です。それでもいいよ、という方はお読みください。

## プロローグ

こんなことが、有り得るのだろうか。

「ほら、ミルクでちゅよー！」

「うっ、やっ！」

「ほら、飲まないと大きくなれないわよエリア」

「やあ〜っ!！」

寝て、起きたら赤ん坊になってました。

いやいやいや、ホントなんですよ。ほら見て、俺の手。ちっちゃくなっちゃってまあ可愛い。

色々意味分からんこともあるが、あれだ。俗に言う転生って奴だ。なんでこうなったかは知らん。

目の前には若い青髪の女性。哺乳瓶片手ににじり寄ってくるのを見るに、俺の母親らしい。

父親はぶ、ぶれいさー……?なんてのをやってるらしく、滅多に家に帰ってこない。ま、夫婦仲はいいらしいけれどね。

さてさて、俺の名前はエリア・オーフェン。女の子っぽい名前だが、れっきとした男なので、そこんところよろしく。

転生する前の名前もあったと思うが、なぜか思い出せん。まあ、今俺はエリアなのだから、踏ん切りつけるか。

恐らくもう戻れないんだろうし、喚いてもしかたねえ。腹括るしかないだろうさ。

「ほらほら〜」

「や、やあああ〜！！（そ、そんな粉っぽいものを近づけるな〜！！）」

七耀暦1186年5月24日、ゼムリア大陸南西部の国リベール王国の地方都市ロレントにて、転生者エリア・オーフェン、誕生。

## 幼少期 エリア5歳

この世界に産まれて5年。なんとか元気に生きている。友人も出来たし、お気に入りのお店のストレガー社製のスポーツシューズだって調子がいい。

いくつかが分かったことだが、この世界は前の世界と大きく違っている。たとえばアーツの存在。

戦術オーブメントというものを使うと、導力というエネルギーによって、魔的な何かをこの世に具現化させることが出来る。それがアーツだ。

父さんが使っているのを目にしたことがあるが、ありゃあ凄いな。物理法則とかまるっと無視してるもん。

まあ、そんな風に平和に過ごしていたわけだが、なんだか最近きな臭くなってきた。

大人たちの会話をちよくちよく盗み聞きするんだが、どうも近所のエレボニア帝国との関係が怪しいらしいのだ。

「ねえ、おとーさん。ていこくとせんそうになるの?」

「そうだなあ、もしかしたら戦争になるかもなあ。」

「こら、あなた！エリアを不安にさせるようなこと言わないで!!」

「す、すまん……」

超絶美人な母上にど叱られるとーちゃん（威厳皆無）。特徴がないのが特徴なこの親父が、どうやって母上を射止めたのだろうか、永遠の謎である。ちなみに父さんは、遊撃士ランクBらしい。思った以上にベテランで、かなりビビった。

これで俺が時々父さんの戦術オーブメントをパクって弄ってるって知れたらどうなるだろうか。

あ、なんか俺、適正的には水属性にマッチしてたみたい。ただ、地属性はてんで駄目だった。まあいいや。

あと、町から離れたところに住んでるエステルちゃんが、よくカエルとか持って追い回してきます。

俺の出身は日本。貧弱な坊やを地でいていた俺は、虫とかカエルとか大嫌いなんです。涙目で逃げます。

でも、釣りを一緒にしたりする数少ない友達だったり。べ、別に友達少なくて悲しくなんてないんだからねっ！

「エ〜り〜ア〜くん〜！あ〜そ〜ぼ〜！〜！」

「……ふう」

「あら、エステルちゃん来たみたいね。エリア、支度なさい」

「もう出来てるよ」

「まったくこの子は。なんでこんなに無愛想になっちゃったのかしら……」

ぶつぶついいながら台所へ行く母上と、我関せずでリベル通信を読んでいる父さん。いや、俺にもなんでか分からないんだ。ホントに表情筋が仕事しなくて……まったく。

今日はエステルちゃんと釣りに行く約束をしていた。肩にはロイドとかいう変なオッサンからもらった釣竿ピスキスハート。

「よーっし、釣るわよ!」

「今日は、ロックが狙い目」

「ふふん、大物釣れたらお母さんがご褒美くれるって」

「っ!?!」

「ご褒美!?!レナさんの!?!」

エステルちゃんのお母さん、レナ・ブライトさんは、ものすごい美人だ。実は俺の初恋の人（既婚者ということを知って絶望した）で、よくご飯に招かれているので、顔見知りなのだ。

「俄然やる気……出てきたぞ」

「エリアくん、気合入ってるね……あたしも負けない!!」

5歳の春。こうして友達とのんびり釣りなど嗜んでいるが、このとき俺は想像すらしなかった。

1年後、自分の身近な人が、戦火に巻き込まれるなんて。



## 百日戦役 エリア6歳

崩落する時計塔。上がった悲鳴はどこからだったのだろうか。

俺とエステルちゃん、レナさんは、戦火から逃れるために走っていた。

エレボニア帝国はリベール王国へと侵攻し、次々と領土を侵略していく。そしてついに、このロレント地方にも侵略の手が伸びてきたのだ。

飛び交う怒号と動力銃、色とりどりのアーツは、こんなときにあれだが、花火みたいで綺麗だと思った。

と、次の瞬間、轟音と共に時計塔が崩れ去る。俺たちは丁度、時計塔の真下を走っていた。やけにスローモーションに感じる視界。

「危ないっ!!」

グンツと引き寄せられ、抱き寄せられる感覚。そのあとの衝撃によって、俺は意識を手放した。一瞬、栗色の綺麗な髪を見た気がする。

>>>>

「はっ!？」

体中が痛い。動かそうとしてみたが、右腕が動かない。

そこかしこを走る痛みに顔をしかめつつ回りを見ると、視界に真っ赤な液体が入った。どうやら頭を切っているらしい。

だいぶ状況を把握したことで、すぐ近くで、誰かがすすり泣く声が聞こえる。

そちらにゆつくりと顔を向けると……ボロボロのレナさんと、彼女にすがり付いて泣くエステルちゃんがいた。

いつもは快活な笑みを浮かべ、元気という言葉を体現したような彼女は、ぐったりとして動かない母親の前で、目を腫らして泣いている。

いまだに朦朧とする頭で、何とか体を動かす。衝撃で吹っ飛ばされたのか、彼女たちとはずいぶん離れていた。

左腕だけで体を引きずって、エステルちゃんとレナさんの下へ急ぐ。と、途中で遊撃士か軍人が落としたのだろうか。戦術オーブメントが落ちていた。

拾おうと、右腕を動かそうとしてもやはり動かないので、口でくわえる。ちらりと見たら、よかった、水系クオーツはちゃんとあるみたいだ。

「う、うう……お母さん……！」

「じほっ、じほっ……『ティア』！」

青白い光が、レナさんを包み込む。だが、レナさんは微動だにしない。回復の兆しもない。

俺が近づいてきていたことに今まで気づかなかったのか、エステルちゃんが俺を見て驚きの声を上げる。

「っ！え、エリア君!？」

「はあ、はあ……『ティア』!!」

再びレナさんに治癒のアーツをかけるが、効果は見られない。

三度目、アーツを使おうと思い、戦術オーブメントを左手で握り締めた瞬間、横からエステルちゃんに止められた。見たところ、エステルちゃん自身には怪我は見られない。よかった。

「邪魔……レナさん、治さなきゃ……」

「駄目だよ……エリア君、死んじゃうよ!!」

「え、死ぬ……?」

彼女をよく見たら、なぜか俺の右腕の辺りを握り締めている。

どうしてそんなことを……?

そう思い、無意識のうちに目を逸らしていた右腕に目を向ける。

溢れ出るとす黒い血。断面から覗く白いのは、骨だろうか？

俺の右腕は断裂していて。そこから溢れ出る血を必死で止めようとして、エステルちゃんが返り血に濡れる。

その様子を見ながら、「ごめん、汚れたね」と場違いなことを口走ったあと、また意識を飛ばした。

後にこの侵略は「百日戦役」と呼ばれる。これはエステルちゃんの父親であるカシウス・ブライト大佐の機転により、リベール王国とエレボニア帝国の両国間で講和条約が結ばれて約百日で終結した。

このときのエレボニア帝国による侵攻はすさまじい勢いでされ、王都グランセル及びレイストーン要塞を除く領土を瞬く間に占領された。もしカシウスさんの作戦とカルバード共和国の協力がなければ、今頃リベール領ではなく帝国領となっていただろうと思う。

だが、この百日戦役で失ったものは、あまりにも大きかった。エステルちゃんの母親であるレナさんの死。そして何より、俺の両親の死だ。

2人はどうやら、戦って亡くなっただけ。武装した姿で、体中を切り裂かれていたそうだ。

それを知った俺は、何もかもやる気を失った。転生、という形ではあったが、彼らは確かに俺の父と母だったのだから。

俺は死ぬことは免れたが、右腕と気力を失った。エステルちゃんには母であるレナさんを失っても、努めて明るく振舞おうとしていたのに……自分が情けなくて仕方ない。

両親が亡くなり、身寄りのない俺は、マーシア孤児院へと預けられることになった。ヴァレリア湖の西に位置するルーアン地方であり、穏やかでよさそうな所だ。

ロレント地方を離れると言うことで、エステルちゃんや仲良くしてくれた友達は泣いてくれたが、それを見ても俺は心が空っぽのままだった。

## 新たな日常 エリア14歳(前書き)

今回は2000年。物語開始の2年前です。  
主人公の年齢が精神年齢に追いついてきたので、文章も多くなってきました。

## 新たな日常 エリア14歳

「グモオオオオ!!」

「これで……終わりだ!」

ガガガツと盛大な音を立て、ウリボアと言う猪のような魔獣に銃弾を雨あられと撃ち込む。割と体力のある魔獣だが、削りきつたのか、その重たい体を横たえた。

俺はウリボアが起き上がらないか警戒し、ようやく構えを解く。両手に握りこんだ動力銃は、帝国製のベル・アサルトとかいうものだったか。それが左右に2丁。いわゆる双銃だ。あまり帝国には良い感情は持てないが、あれからもう8年が経つのだ。そろそろ割り切ってきてはいる。

そう……あの地獄のような百日戦役から、8年だ。今は七耀暦2000年。俺も14歳だ。

青い髪は伸び、今では後ろで束ねてポニーテールにしている。もう染み付いてしまったような無表情と、成長するにもなつて鋭くなつていった目つきは、初対面の人に冷たい印象を与える。だから目も悪くないのに細いフレームの伊達メガネをかけるようになったが、ますます冷たいと言われてしまった。インテリ風で自分では気に入っていたから、結構シヨックである。

身長は、同年代では大きいほうで、すでに165センチを超えた。もうすぐ170代に突入するだろう。筋肉はあるがあまりすぎもせず、細身で長身というひよる長い感じになつてしまった。ひそかに腕とかを鍛えている。



ふさぎこんでいた俺も、世話になった孤児院のみんなのおかげで、前向きに生きることができるようになった。これも、テレサ院長やクーのおかげだと思う。今は遊撃士協会フレイサーギルドで準遊撃士として働いていて、正遊撃士を目指している最中だ。最初はギルドも若すぎるといって難色を示したが、手配魔獣を横取りしまくっているうちにあきらめてくれたみたいで、遊撃士になるための教育とかいろいろしてくれた。その結果、本当に一月ほど前だが準遊撃士として認められ、働くことになったのだ。嬉しかった。

ああそれと、あの時失った右腕だが……ツァイス中央工房に頼んだら、機械義手を作ってくれた。何だあのマッドな集団。義手を頼むって言ったら、「ならオーブメント内臓型にしよう!」とか「武器も内蔵できるようにしよう」とか「ロケットパンチは男の夢だろう」とか「もうドリルでよくね?」「」「それだ!!」「」「とか……ざけんな。

とにかく当時10歳の俺は、必死で抵抗してなんとかマシンな義手を作ってもらった。デザインは某人気漫画のオートメイルそっくり。オーバーテクノロジーじゃねえの……? 結局戦術オーブメントを表面に設置でき、収納上手になったMy義手。なにやらあの爺どもは怪しげな仕掛けを用意しているらしいが、怖くてまだ使っていない。まあ、使い心地はいいし、とくに問題はないみたいだ。

「うーっす、退治終わりました」

「おやエリア君。もう終わったのかい?」

「いや、たかがウリボアですよ？まあ、メーヴェ海道にいたのは微妙ですけど」

「そうだね。だけどたかがウリボアと侮っちゃいけないよ？異常発生で群れていることも、ないとは言いつれないんだから。いくらエリア君だって、10頭規模のウリボアは苦戦するだろう？」

「うっ、そうですね。すみません」

「いやいや、とにかく無事でよかった。ほら、これが今回の報酬だ」

ここは遊撃士協会のルーアン支部。港町らしく活気のあるいい町で、第2の故郷となっている。

帰ってきた途端お説教を食らってしまい、ちと落ち込むが、俺もまだまだっていうことだろう。孤児院のみんなを守るために精進しなければ。

先ほど俺をやんわりと諫めてくれたのは、このルーアン支部の受付であるジャンさん。まじめで優秀なんだけど、好奇心が旺盛すぎるのが玉に瑕というか……まあ、変わった兄さんだ。

とにかく今日の分の稼ぎは得たし、緊急の依頼もないっばい。じゃ、今日は帰るか、ということ、我が家となっている孤児院へ向かう。と、ギルドの扉を開けると、後ろからジャンさんに声をかけられる。

「そうそう、エリア君なら大丈夫だと思うけど、最近レイブンの活動が活発になってきているらしいから、気をつけてね」

「レイブン……？たしか、アガットとかいうのが抜けてからは大人しかつたんじゃない？」

「その関係で気が立っているのかもしれないね。なんにせよ、気をつけて」

「了解、ありがとうジャンさん。また明日」

ギルドを出るとまだ高い位置にある太陽の光が目に入る。まぶしいが、まあ気にならない程度だ。

白い石畳を歩いて、町を後にする。少し街道を歩いていけば、孤児院だ。途中弱い魔獣がピヨピヨ現れたが、全部銃で追っ払っている。この国では双銃使いは少ない。なぜなら手数は多いが命中精度が疎かになるからだ。ただでさえ低い威力の動力銃。牽制で使い、アーツ攻撃をメインにする人のほうが多い。牽制程度にしか使えないのに、双銃で、しかもメインで戦うのは俺くらいだろう。

これには経験となにより適正だな。うん。

そんなことを考えているうちに孤児院に着いた。つつましい小さな一軒家だが、大きな庭では家庭菜園や鶏たちを飼っていたりする。穏やかないいところだ。

庭で遊んでいた子どもたちが、俺を見つけて駆け寄ってくる。はっはっは、かわいいやつらめ。

まわりついてくるガキどもをひよいひよとかわしながら家に入

ると、俺たちの母代わりであるテレサ院長が、キッチンから顔を出した。

「あら、エリアおかえりなさい」

「ただいま先生。ほら、これが今日の」

「いつもありがとう。本当は危険なことは止めてほしいのだけど……」

「何言ってるんだよ。俺は俺の意思でやってるだけだから。ほら、少しでも早く強くなりたいたいしさ」

「そう……ならもう、私は何も言わないわ。子どもたちを呼んできてちょうだい。少し早いけれど、夕飯にしましょう」

このほのかに漂ってくる磯の香りは……マノリア村で有名な頑固パエリアか……！

こんな感じで、今日も俺は新しい家族と食卓を囲む。これが俺の今の日常だ。

## 新たな日常 エリア14歳（後書き）

さて、作中に出てきたクーというのは、みなさんご存知のあの人で  
す。

クーというのは、主人公が勝手につけたあだ名だったり。

これからしばらく、原作開始時期までかかります。

具体的には、主人公を原作開始時には正遊撃士にしておきたいので  
……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1146ba/>

---

空の軌跡AC-another chapter-

2012年1月12日02時50分発行